

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12960

研究課題名（和文）中英語ロマンス文学における宗教の表象研究：Saracenの表象を中心に

研究課題名（英文）The Representation of Saracen in Middle English Romance

研究代表者

趙 泰昊 (JO, THAE HO)

信州大学・学術研究院人文科学系・助教

研究者番号：80868498

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中英語ロマンスと呼ばれる物語ジャンルにおいて描かれるSaracenの表象が、中世後期イングランドの文化的、社会的文脈に応じてどのような役割を担っていたのかを明らかにすることを主な目的とするものである。個々の物語に登場するSaracenに対する分析を通して、中世において「人種」と「宗教」が密接に絡み合うものとして理解されていたことを再確認すると同時に、自らのアイデンティティを変更する「改宗」という現象に注目し、他者の同化を描く物語の持つ「人間集団の再定義」を試みるような機能と、その恣意性を指摘している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世ヨーロッパにおいて描かれたイスラムの表象を対象とする研究は宗教と人種の問題に対する関心の高まりとともに、新たに注目されるようになってきている。本研究は、近代以前には存在しなかったと考えられている「人種」という概念が「宗教」と密接に結びついたものとして存在しており、現代において他者を区別し排除する心的態度はすでに中世ヨーロッパにおいて観察できることを文学作品に対する分析を通して示している。ここで提示された問題意識は、中世イングランドにおける人々の想像力を理解する一助となるだけでなく、人種差別や他者の排除という概念がいかに恣意的に形作られたものであるかを示してくれる。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to explore how the representation of Saracens (the term usually considered to refer to Muslims living in the East and medieval Spain) developed in narratives labeled as 'Middle English romance' and what kind of socio-political roles they were expected to fulfil in each narrative. In medieval European narratives, Saracens are regarded as a typical religious other of Christians and their otherness is often represented through their physical features such as their dark skin, bestial features, and strange cultural / religious customs, even though these features were not accurate for the representation of actual Muslims. Through the analysis of such distorted images of Saracens, my research has attempted to demonstrate how medieval Christians in Western Europe struggled to come to terms with people and cultures different from their own.

研究分野：中英語文学

キーワード：中世英文学 中英語ロマンス サラセン 改宗 ハイブリッド

1. 研究開始当初の背景

中世ヨーロッパにおいて描かれたイスラムの表象を対象とする研究の歴史は長く、20世紀前半には既に古仏語で書かれた武勲詩やラテン語の年代記に登場する *Saracen* の表象に対する綿密な分析がなされている。ヨーロッパに住む白い肌をしたキリスト教徒とは対をなす存在としての黒い肌をした *Saracen* の表象は、特に2001年9.11以降、宗教と人種の問題に対する関心の高まりとともに、新たに注目されるようになっていく。また、こうした関心を共有する中世の歴史、文化、文学を対象とした研究は、しばしば近現代に特有の事象であると考えられてきたレイシズム(人種差別主義)が近代以前にも見られたと指摘しながら、それぞれの議論において *Saracen* の表象を重要な要素として扱っている。中世英語文学を対象とした研究においても、こうした問題意識を示す研究が次々と発表されている。その中でも2010年以降に発表されたいくつかの主要な研究においては特定のロマンス作品や写本における *Saracen* の機能や文化的意義が扱われているが、それらは様々に分類可能な役割の特定の側面にのみ焦点を当てた *Saracen* 表象の分析となっている。言い換えれば、中英語ロマンスとして分類される一群の物語における *Saracen* の表象を網羅的に論じる研究はいまだ十分になされていない。

こうした学術的な背景を踏まえ本研究では大きく二つの「問い」を設定した。本研究における第一の問いは、西洋中世のキリスト教徒にとって、異教徒である *Saracen* が宗教と人種という二つの基準によって異質な存在として描き出される際に、それらの表象はその歴史的、社会的文脈においてどのような意義を持つものであったのか、というものである。また、第二の問いは、11世紀から12世紀頃に古仏語で書かれた武勲詩が十字軍による東方遠征の影響を色濃く映し出しているのに対して、そうした熱狂が徐々に減退していく中、異教徒を国外追放するなどの措置を取っていた13世紀以降の後期中世イングランドで作られた物語において、依然として高い人気を誇った *Saracen* に期待された役割はどのようなものであったのか、というものである。

2. 研究の目的

本研究はBurge(2016)によって42点あると分類された *Saracen* を題材として扱った中英語ロマンスを中心に *Saracen* 表象を横断的に調査し、それぞれの作品において表象が持つ機能や意義を、写本の製作された状況や歴史的な現象などの分析を通して分類し、中英語で書かれた作品群における宗教・人種的他者としての *Saracen* が果たしていた役割を明らかにすることを目的とした。後期中世の西洋キリスト教圏において、それぞれの地域の俗語で語られた物語であるロマンスに対する研究の数は多く、近年では中英語で書かれたロマンスを単なる娯楽や余興のためのものではなく、フランスやスコットランドなどに対する国家意識の形成や、同時代の社会における問題意識の反映、個人あるいは集団的アイデンティティの確立のための場として捉える先行研究がなされている。こうした研究において、それぞれの主題に即した分析対象として *Saracen* の描写がしばしば重要な要素として取り上げられることがある。本研究では、物語における *Saracen* の役割が軽微であることによって先行研究ではあまり扱われてこなかった作品をも視野にいれながら中英語ロマンス作品を分析することで、従来の *Saracen* 研究においては見落とされていた *Saracen* の役割や機能を明らかにすることを目指した。この目的のため本研究では、宗教と人種の二つの軸によって他者として規定される *Saracen* 表象が、共同体外部に属する異質な存在でありながら、信仰を改めることによって同化される存在として想像されていたという点に着目した。加えて、中英語において頻繁に登場する *Saracen* のもつ役割を正確に理解することで、それらを頻繁に用いた中英語ロマンスというジャンルが共通して持つ特徴を明らかにすることを試みた。現実世界における問題を暴き、理想化された解決策を提示する性質を持つと指摘される中英語ロマンスにおいて、共同体の外部に位置する他者でありながらその性質を変化させ、望ましい姿となることのできる *Saracen* 表象の特質を分析することで、中英語ロマンス全体の特徴に対する、新たな視点から検討が可能になる。

また、過去における人種や宗教対立の様相を対象とする本研究は、人種問題や文化的な区分に基づいた差別意識の根本的な問題について再考するきっかけを与えるものであり、異なる文化的、民族的アイデンティティを持つ人々同士の相互理解の実現といった問題に対して、新たな提言をする可能性を持つものでもある。

3. 研究の方法

本研究では中英語ロマンスとして分類される作品における *Saracen* 表象を分析し、その役割を

分類する。その目的のために、本研究では【1】【2】について同時に研究を行った。

【1】中英語韻文ロマンスに見られる Saracen 描写を網羅的に調査する基礎的研究。

Saracen が登場する中英語ロマンス作品のうち、個人のアイデンティティが変わる場面を内包する物語を中心に分析を進める。Burge (2016)や Calkin (2005)などの中英語ロマンス作品における Saracen 分析の知見をもとに、それぞれの作品間の異同を明らかにする。

【2】中英語韻文ロマンスにおける Saracen 描写の役割を、物語における機能、写本の製作状況、歴史的背景などの面から分析する応用的研究。

作品内部の分析を踏まえ、それぞれの作品や写本の製作年代などを踏まえながら、【1】でまとめたデータの分析を進める。Saracen 表象の分析にあたっては、中世における他者表象の雛形となったユダヤ表象などとの比較を通して、Saracen 表象の特異性をより明確に示すことを目指した。

4. 研究成果

西洋中世キリスト教圏における Saracen の表象に対する分析の歴史は長く、20 世紀を通して中世のキリスト教徒によって描かれた Saracen の表象の詳細な分析と、分類が行われてきた。20 世紀前半の研究の流れを汲み、中英語ロマンスにおける Saracen 表象は Metlitzki によって 1977 年に分析されている。21 世紀初頭にはそうした記述的な Saracen の描写分析だけでなく、**人種や国家、言語や身体的特徴などを扱うポストコロニアル批評などの知見を取り入れた研究**が数多く発表されている。これらの研究においてロマンスはしばしばその中心的な研究対象として扱われ、ロマンスにおける Saracen の役割はそれぞれの文脈において論じられている。Heng (2003)や Calkin (2005)、Burge (2016)などの研究は中英語ロマンスにおける Saracen を国家意識の形成や、他者との交流などの視点から論じている。本研究はこうした国外の先行研究の流れを汲みつつ、個別の作品や歴史的状況にのみ焦点を当てるのではなく、中英語ロマンスとして分類される作品に現れる Saracen の表象を横断的に調査することで、従来の Saracen 研究では見落とされてきた役割や機能を明らかにすることを試みた。特に、中世の宗教的アイデンティティが持つ、現代の「人種」との類似点に注目し、人種的・宗教的他者としての Saracen の役割を分析した。

中英語ロマンスに描かれる人種の特徴と信仰の関わりを軸に論じた“**The Performativity of Racial-Religious Identity: The Representation of Saracens in Middle English Romances**” (*Études Médiévales Anglaises*, Vol. 95)では、歴史家 Robert Bartlett が指摘したように、中世における「人種区分」は流動的で変化しうる可能性のあるものとして理解されており、文化的な性質と密接な関わりを持つものとして描かれていることを確認した。加えて、中世の物語に描かれる「人種」と「宗教」の関係を分析し、物語中に登場する Saracen に付与された人種的アイデンティティは個人の言動によって常に証明されるべきものとして理解されていた可能性について指摘した。

現代においてしばしば先天的で不変のものとして理解される「人種」をめぐるこうした議論を、中世における信仰と改宗という文脈においてさらに深化させたものが「**中英語ロマンスにおける異教徒の改宗と信仰の証明**」(『信州大学人文科学論集』, 第9号(2))である。この論考は、日本英文学会において発表した中英語ロマンスにおける「改宗」と信仰の証明というテーマを踏まえて書かれたものであり、物語中に描かれるサラセンの騎士がキリスト教共同体へと加わる際に直面する問題を通して、中世における宗教的アイデンティティの変更や証明が、現代における人種同様に、極めて困難なものであり、改宗者が洗礼後にも常に疑いの目に晒されていたという事実を明らかにした。

こうした議論を通して本研究は、宗教と人種の二つの概念が中世ヨーロッパにおいていくつかの重要な共通項を持つことを示した。まず、宗教は現代における人種同様に身体的な特徴を伴うものとして理解されており、その変更には常に困難が伴い、共同体の成員に向けた証明が求められていたこと。そして、中世における宗教は生得的な属性として見做され、遺伝するものとして理解されていたことである。国際学会である第57回 International Congress on Medieval Studies における研究報告では、鎧を変えて自身の正体を偽るサラセンの騎士の事例を取り上げ、個人の人種的・宗教的アイデンティティが、身体に備わった不変のものではなく、衣服や武具などの着脱可能な外的な指標によって周囲に対して示されるものであったという可能性を指摘している。この視点は、共同体外部に存在する他者と自己の区分のために用いられる指標が必然的なものではなく、恣意的に作り出されたものであるという可能性を示唆している。これは、Fredrickson が論じる「人種主義」という概念 ある集団に見られる特定の特徴をその集団を定義づける本質的で不変のものであるとみなし、その区別が必然的なものとしてみ直す見解が中世において存在していたことを証明するものであると言える。同時に、物語中に描かれるこうした問題意識は、個人や集団のアイデンティティをその言動によって絶えず再定義する必要性を反映したものであると考えることができる。対外戦争や国内での異端の存在など、アイデンティティの再定義が重要な問題となっていた中世後期イングランドにおいて、Saracen が登場する物語が受容され続けた事実は、こうした要請と密接に関わっている可能性が高いのである。

本研究プロジェクト全体で、当初予定していた全ての文学作品の分析と研究結果の発表は実現しなかったものの、いくつかの特徴的な作品に対する詳細な分析を通して、前近代における宗教と人種の結びつきが明らかになった。過去における人種や宗教対立の様相を対象とする本研究は、人種問題や文化的な区分に基づいた差別意識の根本的な問題について再考するきっかけを与えるものであり、そうした区分の恣意性を指摘することで、異なる文化的、民族的アイデンティティを持つ人々同士の相互理解の実現といった問題に新たな視点を提供するものであると言える。現在、日本ではこうした分野の研究は盛んであるとは言えない。また本研究の代表者が参加した2017年のInternational Medieval Congressでは、他者性‘Otherness’をテーマとしながらも、報告された研究内容の多くが、西洋に住む白人キリスト教徒による問題を扱ったものであったという点が指摘されている(Heng 2018)。西洋キリスト教圏や、中東やアフリカのイスラム文化とも異なる日本においてこうした研究が行われる意義について、本研究はその重要性を発信する一助になるはずである。

<引用文献>

- Bartlett, Robert, *The Making of Europe: Conquest, Colonization and Cultural Change 950-1350* (Princeton, NJ: Princeton UP, 1993)
- Burge, Amy, *Representing Difference in the Medieval and Modern Orientalist Romance* (New York: Palgrave MacMillan, 2016)
- Calkin, Siobhain Bly, *Saracens and the Making of English Identity: The Auchinleck Manuscript* (New York: Routledge, 2005)
- Fredrickson, George M. *Racism: A Short History* (Princeton: Princeton University Press, 2002)
- Heng, Geraldine, *Empire of Magic: Medieval Romance and the Politics of Cultural Fantasy* (New York: Columbia UP, 2003)
- , *The Invention of Race in the European Middle Ages* (Cambridge: Cambridge UP, 2018)
- Jo, Thae-Ho, ‘The Performativity of Racial-Religious Identity: The Representation of Saracens in Middle English Romances’, *Études Médiévales Anglaises*, 95 (2020 for 2019), 7-40
- Metlitzki, Dorothee, *The Matter of Araby in Medieval England* (New Haven, CT: Yale UP, 1977)
- 趙泰昊「中英語口マンズにおける異教徒の改宗と信仰の証明」『信州大学人文科学論集』, 9 (2022), 163-182

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 趙泰昊	4. 巻 9
2. 論文標題 中英語ロマンスにおける異教徒の改宗と信仰の証明	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 163-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Thae-Ho JO	4. 巻 95
2. 論文標題 The Performativity of Racial-Religious Identity: The Representation of Saracens in Middle English Romances	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Etudes Medievales Anglaises	6. 最初と最後の頁 7-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Thae-Ho JO	4. 巻 0
2. 論文標題 Imagining the Racial-Religious Other: The Representation of Saracens in Middle English Romances	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Keio American Studies	6. 最初と最後の頁 131-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Thae-Ho JO
2. 発表標題 Symbolic Armor and the Performativity of Racial-Religious Identity in Middle English Romance
3. 学会等名 International Congress on Medieval Studies（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 趙泰昊
2. 発表標題 中英語口マンスにおける他者の同化とアイデンティティの証明ーサラセンの改宗譚を中心に
3. 学会等名 日本文学学会第93回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大沼由布・石黒太郎・菅野磨美・杉山ゆき・高橋三和子・趙泰昊・小川真里・小林宜子・赤江雄一・井口篤・西川雄太・新居達也・工藤義信・池田真弓	4. 発行年 2022年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 304
3. 書名 旅するナラティブ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------